

# 2015 年度 土を考える会 秋期研修会 九州沖縄



開会挨拶をする手島健次郎氏

▶9月8日、9日  
(福岡県朝倉市・大刀洗町)



ビジネスモデルの要点を紹介した岡田太氏



農業情勢について話題を提供した内山智裕氏



ディスカッションのパネラー陣



参加者らの集合写真



柳利喜氏の乾田直播圃場 (6月10日播種)

## テーマは「契約の損得勘定 契約栽培の本質に迫る」

去る9月8、9日に福岡県朝倉市で九州沖縄土を考える会秋期研修会が開催され、農業経営者と関係者を合わせて40名余りが集まった。今回の研修会は契約栽培に焦点を当てつつ、農業情勢やリスクマネジメント術を学ぼうという企画だ。会は手島健次郎会長の挨拶で始まった。

初日のトップは東京農業大学国際食糧情報学部准教授の内山智裕氏の講演。現行の政策を読み解くポイントを示しながら、農業への企業参入の実態、契約栽培の事例を紹介した。とくに米国の生産契約の詳細が報告された。

続いて、登壇したのは(有)大自然ファームの本田亮希氏(熊本県菊陽町)。

ニンジンの契約栽培とブランド戦略について発表した。現在の経営スタイルを確立するまでに、どのような戦略を立てて、課題をどのようにクリアしてきたのか。実体験に基づく解説には説得力があったようだ。

2つの講演の後は、九州沖縄農研センターの中野恵子氏をアドバイザーに迎え、内田智也氏(熊本県阿蘇市)が進行役を務めたパネルディスカッション。パネラー席に座った中原良輔氏(大分県中津市)、酒井勝洋氏(大分県宇佐市)、本田亮希氏の自己紹介もそこそこに「契約栽培のメリットとデメリット、その対策」をテーマに本音トークが始まった。

どの作物で契約栽培に取り組んでいるのか、取り組みのきっかけ、販売価格や手数料、天候不順などで物がないときの対処方法などが次々に

語られた。コメや稲WCS、ジャガイモ、ニンジンなど作物による違いもあるが、共通するのは契約書を作成していないこと。それゆえ、いかに信頼関係を築いて長期的な取引に結びつけるかに話題が展開した。失敗談や不安も語られ、互いの経営のヒントになった様子だった。

翌日の座学のテーマはビジネスモデルの要点。日本大学商学部准教授の岡田太氏の進行でグループに分かれ、企業がどのようにして価値を創造、提供、獲得するかを話し合ってから発表し合った。

最後にオプショナルツアーで訪れたのは、同県大刀洗町の柳利喜氏の乾田直播圃場。「元気づくし」はブロードキャスターで10a当たり4kgを播種。草が抑えられ、順調に生育する稲姿に参加者らは圧倒された。